

新刊紹介

ボリス・ファウスト 著 鈴木茂訳 『世界歴史叢書 ブラジール史』

近田亮平



明石書店
2008年

本書は、ブラジルの著名な歴史家ボリス・ファウスト（サンパウロ大学名誉教授）の *Historia concisa do Brasil*（二〇〇一年）の全文を日本語に訳したものである。著者は本書において、一五〇〇年のブラジル「発見」から二〇〇三年のルーラ政権誕生までの歴史を、植民地時代、帝政時代、第一共和政時代、ジエトゥリオ・ヴァルガスの国家、民主主義の実験、軍市政権と民主主義への移

行／確立、という六つの時代に分け本文四七七ページにわたり論じている。

ただし、本書では原著に対して以下のような変更や補足が加えられている。まず、原著には図版がほとんど掲載されていないため、同著者の *Historia do Brasil*（一九九四年）所収の画像や図表が転載されていること（原著は同書の要約版）。また、原著には含まれていない最近の動向を収載すべく、第六章の内容と標題の一部および「結語」が変更されていること。さらに、一九九四年の原版掲載の年表に基づく関連年表に加え、事項・人名・地名ごとの詳細な索引が訳者作成により巻末に付載されていることである。なお、各章のテーマごとにまとめられた参考文献や訳者解説などを合わせ、これら巻末部分は六五ページに上り、ブラジル史を学ぶための教科書として本書を活用する際に大変有益だといえる。

著者は「日本語版への序」において、ブラジルの歴史をあまり知らない日本の読者を対象とした本書の意図を、歴史叙述に力点を置き、著者が基本的と考える知識を提供すること、および、ブラジル史研究に関する重要な論争を紹介すること、だと述べている。また、進化論的な過程として捉える視点の単純性と「情性」を強調する見方の不変性を批判し、著者はこれらと正反対の「ブラジルは変化する」という視点に立つと明

言している。さらに、文化についてはその複雑さと重要性ゆえ、別の本にまとめるべく本書では対象としていない旨を付説している。

また訳者は、原著を一般読者向けのブラジル史として選んだ理由として、一人の著者によって一貫した視点で書かれた通史であること、英語版も刊行されておりブラジル内外で高い評価を得ていること、史学史をふまえた歴史叙述になっていること、同国を取り巻く地域的な枠組みの中でブラジルの歴史を叙述し、領土的一体性を正当化するような国民国家の現状肯定の傾向を免れていること、の四点を挙げている。特に最後の大局的な視座は重要であるが、ブラジルのような大国を学ぶ際に欠落しがちであり、本書で展開される「ブラジルの奴隷制度の性格、独立後にブラジルが分裂しなかったこと、権威主義体制から民主主義への移行の特徴などの議論」をより深く理解するために留意すべき点だといえる。

ただし、本書が語る「ブラジルの歴史」に関して、訳者が指摘する奴隷制度や人種差別、一九九〇年代以降の社会変動の諸点に加え、軍市政権下の再民主化過程において「解放の神学」の影響を受けたキリスト教基礎共同体の果たした役割が全く言及されていないなど、異論や物足りなさを感じる読者もいるであろう。また、「過去」に異なる解釈がありうる「ことは理解できるが、これらの点とともに、本書が叙述するブラジ

ルの独立の達成や共和制への移行などの歴史にダイナミズムの欠如を感じる部分があることも否めない。さらに、特に二〇世紀半ば以降の部分に顕著であるが、若干の信憑性の問題が散見されるデータに基づき、社会・経済構造の認識が行われていることや、意味段落としてのまとまりが希薄なため、歴史の流れや議論の構造を理解し辛い箇所があることなどを問題点として指摘できよう。

近年のブラジルは、経済の安定した成長と今後のさらなる発展への期待、民主主義の定着と政治的地域大国としての重要性の増大、社会における市民活動の活性化などの点で、世界的な注目を集めている。また、約三〇万人ものブラジル人が日本で生活していることや、二〇〇八年がブラジルへの日本移民一〇〇周年であることから、日本でも同国に対する関心が高まりを見せている。しかし、このような現状と「両国の深い絆にもかかわらず」、ブラジルの歴史が日本で広く知られ、考察や議論の対象になっているとは言い難い。したがって、ブラジルの歴史をより深く知り得るとともに、同国について日本や世界との関連から考えるきっかけを提供してくれる本書が、未来に向けた両国の結びつきの強化を目的とした「日本ブラジル交流年」の今年、日本で刊行された意義は非常に大きいといえる。

（こんた りょうへい／アジア
経済研究所地域研究センター）